

略語

皮膚疾患は臨床的特徴，出現する症状の組み合わせ，病因的な立場，あるいは病理組織学的特徴などさまざまな観点より病名がつけられている。短い単語より成る病名であれば大変すっきりしている。最近では欧米から新たな病名を使用した症例報告がわが国に持ち込まれる。そして、同様な症例の報告が続くと、欧文の病名が日本語名にされることなくそのままの病名として、広く流布することになる。本号に掲載された症例報告はそのような外国語で表現される皮膚疾患を集めている。その病名は長々としたものが多くなる傾向にあり、臨床症状を羅列した病名では疾患の特徴が類推できることでは便利であるが、もう少し短くならないものかと考えさせられる。

このような外国語で表現される長々とした病名では、頭文字をとった略語がしばしば使用される。日常診療の中でそれが広く使われていると、略語で表現されても誰しも疾患名を理解することができ、略語辞典にも掲載されるようになる。例えば、「BCC」と書けばbasal cell carcinomaの略語であることは周知のことで、辞書にも掲載されている。そのいくつかの略語辞典では、皮膚科関連の編集者が加わっていないためか、皮膚科領域で頻用されている疾患の略語が抜けてしまうことがある。AK(actinic keratosis)、SK(seborrheic keratosis)などはよく使用されている略語であるが、略語辞典に掲載されていないものがある。また、同じ略語であっても、使用する領域によっては違った意味に使われることに注意せねばならない。「VV」は皮膚科領域ではverruca vulgarisであるが、外科用域ではvaricose vein、産婦人科領域ではvulva and vaginaの略語として使われることがある。このように皮膚科特有の疾患では、略語のみでは他科の医師には何の略語か理解できないことがある。また、皮膚科領域の疾患でも、generalized atrophic benign epidermolysis bullosaの略語としてのGABEBは、その領域の疾患に関心を持っていないと何の略語であるか判断に困難を感じるようになる。混乱を避ける意味で、正式な単語を書き、その後に略語を記載することが親切である。ことに他科の医師が目にする文章では略語のみで表現することは避けたい。まして、自分勝手な略語をつくって表現されることは誤解を生むことになる。

病理組織学的検査の依頼伝票に病名を書く欄があるが、ここに略語の病名を書く医師が多くみられる。SCC(squamous cell carcinoma)などよく使われる略語の病名であれば問題はないが、一般病理医にとって馴染みのない略語では意味が通じないことがある。病名が「PN」と記載されていたものがあり、症状の詳記がされていなかったため、血管炎かと思っていたところ、病理組織学的所見は色素細胞母斑であり、pigmented nevusの略であった例がある。

外国語で表現される皮膚病が多くなってきたが、長い病名のため、しばしば略語が使われることがある。略語は簡便であるが、他科の医師が目に触れる文章では正式な病名に添えて使用するようにしたいものである。